Costume of the Army of the British Empire, according to the last regulations, 1814
1814年大英帝国陸軍軍服規定

文化服装学院教授（西洋服装史担当）　朝日　真

本書は1814年の大英帝国陸軍の歩兵隊、騎兵隊、砲兵隊などの各兵種を連隊別、階級別に分け、その軍服をイラスト中心にまとめたものである。兵士たちのイラスト54点、兵種別の軍服色の一覧表6点で構成される。イラストは著者のチャールズ・ハミルトン・スミス（Charles Hamilton Smith、1776-1859）の手によるものである。1815年、ロンドンのW.Bulmer and co.から発行されている。

スミスは多くの経歴を持った人物で、大英帝国陸軍の軍人と博物学者などが主な経歴である。ベルギーで生まれたスミスは、幼少時代にイギリス・リッチモンドの学校へ留学している。オーストリア・アカデミーとベルギーのルーベンでは砲術などを学んでいる。その後、モイラ卿の引き立てによって、大英帝国陸軍の第8軽竜騎兵（りゅうきへい）連隊に籍を置き、軍服は何色がもっとも有効かという実験などを行っている。ライフル銃の標的としてグレー、グリーン、レッドの軍服を使って行われたが、その結果はイギリス陸軍に採用されることはなかった。その後、1814年の大英帝国陸軍の軍服を、正確な描写によってこの著書に残している。

1814年前後のヨーロッパは、ナポレオンを中心とした激動の時代である。1812年、ナポレオンはロシア遠征に失敗する。13年、イギリスのウェリントン公爵によってイベリア半島のナポレオン軍が一掃された。14年、イギリスはアメリカとガン条約を締結し米英戦争が終結する。15年、一度帝位を失ったナポレオンがエルバ島から戻り、ベルギーのワーテルローにてイギリスのウェリントン軍とプロイセンのブリュッヘル軍の連合軍に敗れ、ナポレオン戦争が終結する。

大英帝国軍の代名詞ともなる深紅色（スカーレット）の軍服、通称レッドコートは、イングランドの守護聖人のセント・ジョージのレッドクロスや、スチュアート家のリバーリーコート（livery coat）が赤であったことなどを起源としている。

16世紀、イギリスにおいて軍服の色は赤や青（紺色）のものが多く、それは最も安価に染められるという理由からだった。イングランド南西諸州の軍服は青が多く、西インド諸島のインディゴで染められたものが多かった。その他で着られていた赤い軍服は、敵に威圧感を与え、実際より多くの人数がいると錯覚させる意味もあった。1613年から1655年にかけて、ブリストルにはアムステルダムから17.500lb（ポンド）のアカネが輸入されている。それは1年間に5万8000着のコートを赤く染めることのできる量だったという。

17世紀、清教徒革命の際、王党派と議会派の兵士たちは敵味方区別なく赤、青、グレーなどの軍服を着用していた。敵味方を区別するのはサッシュや羽根飾りだった。1645年、議会派のクロムウェルのニューモデル・アーミーが、全陸軍に赤いコートをユニフォームとすることを宣言したという記録が残っている。その後チャールズ2世による王政復古を経て、ウィリアム3世による名誉革命のときには、将校のコートは青が一般的だった。

18世紀、フランスやオーストリアなどのヨーロッパ主要大陸国が国家の軍服色を決定していく。1702年、マールバラ公爵が自軍の将校のユニフォームを赤にしたことなどから、イギリスは軍服の色を赤に決定する。レッドコートを選択したいくつかの有効性の中に、戦場での砲撃の火薬から出る厚い煙の中で、敵味方を識別する必要性から、赤は合理的であることなどが挙げられる。また横隊で展開したレッドコートのイギリス近衛兵が、ワーテルローのモン・サン・ジャンの丘での戦いで、フランス近衛兵を破ったことは「Thin Red Line」という言葉にも残る。

大英帝国陸軍はナポレオン戦争の時期を通して、1793年に約4万人だった将兵を、1801年には約15万人までに増やしている。その編成はFoot GuardやGrenadiersなどのInfantry（歩兵隊）、DragoonやHussarsなどのCavalry（騎兵隊）そしてArtillery（砲兵隊）に大別される。ナポレオン戦争期間において、大英帝国陸軍の師団編成を頻繁に組織改変している。1811年の時点では、7つの師団で編成された。各師団は2、3旅団で編成されている。軍装規定は1802年に主要なものを定め、1811年にいくつかの規定の変更をしている。

本書にある主な図版を見ていくと、最初に掲載されているのは第一近衛兵連隊の兵士のイラストである（**図1**）。シングルブレステッドで後ろが長い燕尾のジャケット。手に持つカービン銃には銃剣を差している。右腰に革製の弾薬盒には36発分の弾薬が収納できる。帽子は1812年採用の通称ベルギー・シャコー帽をかぶっている。

馬上の第15軽騎兵連隊（フッサール）の騎兵はバジェット騎銃に弾丸を装填している（**図2**）。ブルーのジャケットの上に、袖つきのマントのペリースを肩にかける。ジャケットの前はオスマントルコを起源とする肋骨状のフロッギングで飾る。

ゴードン・ハイランダーズは多くのスコットランド連隊の中の一つである（**図3**）。兵士はレッドコートにスコットランドの伝統衣装キルトをはき、前にスポーランを下げている。彼らはワーテルローの戦いもこの装備で戦っている。

また本書には1812年から14年までの兵種別の軍服色の一覧表が要所に掲載されている。Brithish Cavalry（騎兵隊）、Cavalry Staff Corps（騎兵隊参謀）、British Infantry of the Line（歩兵隊）、Regular Infantry continued（正規歩兵）そしてForeign Corps King's German Legion（外国人部隊、ドイツ人義勇部隊）になり、それぞれのジャケット、プリーチズ、カフ、襟、サッシュ、ラペルの折り返しの色が一目でわかる一覧表になっている。

図1 Privates of the first regiment of foot guards on service.

図2 A private of the 18th. Light dragoons (Hussars)

図3 Grenadiers of the XLIID or royal, and XCIID or Gordon Highlanders